

谷村藩主秋元公三代と日光東照宮

城下町づくりと東照宮と円通院

谷村藩主秋元公三代と日光東照宮

城下町づくりと東照宮と円通院

高取 堅 二

一 城下町づくりの原点

都留市（旧谷村）が城下町となったのは、都留郡守護の小山田氏の中津森館（現都留市金井）が享禄三年（一五三〇）に炎上したので、交通路、経済の発展、軍事上の新しい拠点づくりの為に天文元年（一五五二）に現谷村第一小学校付近に移転して谷村館（後の谷村城）としたのが始めである。



写真1 現在の谷村第一小学校

この谷村城は、小山田氏の後、代々の領主が居城としたが谷村周辺の地下は富士山の猿橋溶岩流に覆われていて井戸が掘れず生活用水が得られないので、城下町づくりは進まず谷村城を中心に家臣団が集落を作り、上谷村・下谷村

の二町が形づくられただけであった。

その後、徳川家康が関東を領し、入国する前の天正十七年（一五八九）に郡内領を巡見して、谷村城が徳川親藩の甲府城の前城で江戸に異変があった時の守りや駿河、甲斐の両国の交通の要所としての重要性から譜代の重臣鳥居元忠や側臣秋元泰朝が配置された。

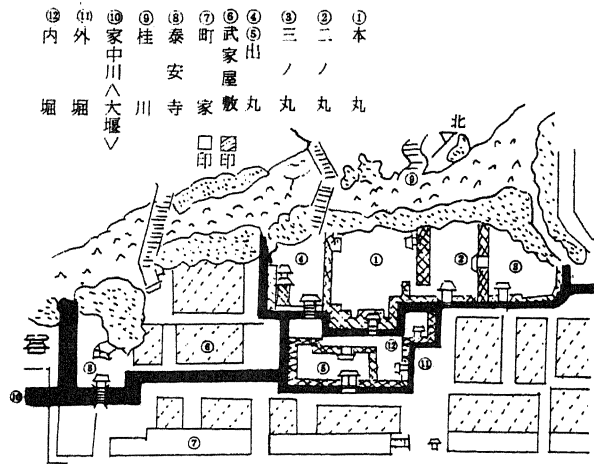


図1 秋元三代谷村城（平城）絵図

こうした理由から立派な城下町づくりが望まれていたが、これを実現したのが秋元三代の治績の成果である。

特に、治水灌漑事業（谷村大堰《家中川等》）は、日光東照宮造営事業を成功させて谷村藩に帰って来た寛永十三年（一六三六）に着工し、三年間で完成している。この資金は上州総社より郡内へ移る際に持参した御用金一万二千七百八十三両と表面御金四万が使われ、領民には御吉例により年貢を三年免ぜられ、工事は「領民十六歳以上は土一升に錢一舁を替える」として、領民は大いに歓び自然に成った。」と云われている。

古き歌に「ココノ五兵衛殿
ウソツカヌ、名モ高山ノ御ヒ
ト哉、土ト錢トヲ林引キカヘ、
ト申ス歌ヲ作り時ノ小兒歌イ
ケリト申伝、……谷村ニハ
井戸ナシ……」との記録が
ある。

この十日市場より谷村城下
まで三里二十一町の間に引き
入れられた水が井戸に替わる

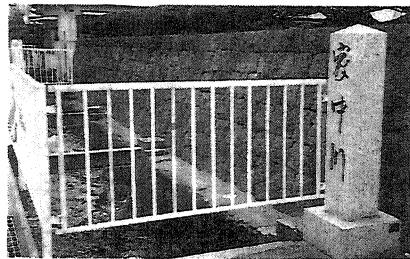


写真2 現在の家中川

派な城下町となった。

また、上州総社より絹師を迎えて興した織物業が地場産業となつて、今日まで甲斐絹織物の産地として三百五十余年の間、城下町都留の発展の基盤となつたのも秋元時代の成果である。

この城下町都留市発展の基となつた秋元三代の治績の原動力は秋元氏が新参譜代の家臣として神君徳川家康公（東照宮）への忠誠心と東照宮への畏敬の念であり、この象徴として秋元泰朝が日光東照宮造営を終えて、家康公の御遺像を拝領して谷村の守護神として祀った「谷村東照宮」が城下町づくりの原点である。

そこで、改めて谷村藩主秋元公三代と東照宮との深い関わりについて調べる事とした。

二 徳川家康（東照宮）の関東入国と谷村城

武田氏が滅亡した後甲州は徳川家康の支配となつたが、郡内領へは北条勢が進攻して谷村城を拠点として北条氏忠が御坂峠を越えて黒駒へ攻め入ったが、甲府を守っていた鳥居元忠が迎え撃った黒駒合戦で徳川軍が大勝、北条氏直と和議が成立して都留郡内領は徳川領となり鳥居元忠に与

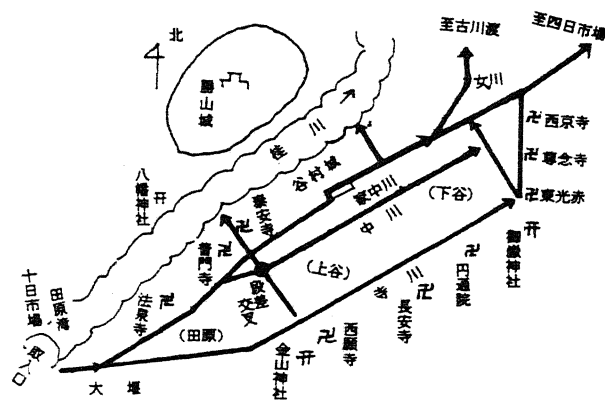


図2 谷村大堰主流水路図

上水として使われ、城下町づくりが進み泰朝・富朝をへて
番朝時代の寛文九年（一六六九）には、家中川を外堀りとする
本丸・二の丸・三の丸の城内を中心と上谷村（久保田・原・
新町・早馬町・上町・上天神町・下天神町・裏天神町・袋
町の九町）・下谷村（深田・新井・姥沢・羽根子・中町・
下町・横町の七町）の両谷村と呼ばれる町並みが出来て立

えられた。

大正十八年（一九二九）七月、小田原城が落城して北条氏が滅んだ後、家康は関白秀吉より北条氏が領していた関東八州への移封を申し渡され八月朔日には江戸城に入府している。

これより先、家康は甲州へ七度も入国し、江戸城入府の前年、天正十七年九月二十九日には都留郡巡見のために谷村城の鳥居元忠の館に泊り、鳥居氏の菩提寺である羽根子村の長生寺にも訪れたと云われている。この事は甲斐国志に「東照宮御入興之地」として記されている。（資料1）

その後、三代將軍家光の弟徳川忠長が甲斐の領主となり、鳥居元忠は支城主・付家老として谷村城主となったが、寛永九年（一六三三）に領主忠長が改易され谷村城主鳥居忠房も山形城主鳥居忠恒に預けられて、寛永十年（一六三三）に徳川忠長の配分が決まり、上州総社から秋元泰朝が谷村城主（一万八千石）として移封して来た。

三 谷村藩主秋元公三代と日光東照宮

(1) 秋元泰朝と徳川家康（東照宮）

秋元氏は宇都宮左衛門「一郎」と称して鎌倉將軍頼朝、頼嗣

に仕えたが、嘉禄二年（三六）上総国周准郡秋元ノ庄を領して秋元を氏とした。

秋元泰朝は秋元長朝の長男として、天正八年（五〇）に武蔵国深谷に生まれた関東武士の家系である。泰朝は天正十八年（五八）には北条氏の人質として小田原に居たがひそかに通れて父長朝のもとに帰り、文禄元年（五九）父と共に始めて徳川家康に御目見している。この時、泰朝は十三歳であったが、家康の御近習となって、慶長五年（六〇）関が原の合戦に出陣した。

茶臼山の本陣では家康を守り、知行地五百石を賜い慶長八年、家康が將軍宣下の拝賀に入洛した際、従五位下但馬守に叙任している。

大御所政治の展開の中で、松平正綱、板倉重昌、秋元泰朝の三人が御近習出頭人となって出世した。

その後、大阪の陣の勲功により五千石を増加され、家康に近侍して、きわめて入魂の間柄となり、加判の列に加わって本多正純のもとで旗本執事として活躍した。

泰朝は豊臣方の残党探索に才覚を示し、中国・四国・海上等や紀州高野山に登ったが、家康は、この功を賞めて「無子ノ鎗」を家康から賜わり、秋元家の家宝となって伝

わっている。

元和二年（六二）、家康が病床にある時、本多正純はじめ御近習出頭人の松平正綱、板倉重昌、秋元泰朝三人に遺命して、死後は直ちに久能山に葬り一年後に日光に遷すように命じられた。

遺命により元和二年四月十七日、家康公が七十五歳で亡くなると霊柩をその夜の中に久能山に移したが、この時も本多正純と御近習の正綱、重昌、泰朝の四人が霊柩に供奉した。

翌元和三年の日光東照社への遷葬には、天海が先導して本多正純と御近習の正綱、重昌、泰朝の三人が供奉し、三百余騎、雑兵一千人が神柩を御迎えした。こうした縁から秋元氏は代々日光東照宮と深く係わるようになった。

（資料2 谷村藩主秋元三代と日光東照宮関係年譜）

更に、泰朝は二代將軍秀忠に小姓組頭として仕え密旨を蒙り、筑前福岡・筑後柳川・肥前長崎・五島辺を巡り、外国警護の事を沙汰するなど活躍し、元和八年父長朝の後を嗣ぎ己れが禄高と合わせて一万五千石となった。

次いで三代將軍家光の代となったが、家光は生まれながらの將軍としての權威を持ち、特に祖父家康に対する畏敬

の念が強く、將軍となるや直に寛永元年（六四）に松平正綱、秋元泰朝に日光山御宮造宮奉行を命ぜられ、造宮に関して、総べて両奉行の指揮命令に従うように申し渡された。

（資料3 日光山造宮法度）

その後秋元泰朝は、寛永十年（六三）には三千石を増加されて一万八千石となって甲斐国郡内谷村の城主となった。



写真3 秋元泰朝画像

泰朝は、寛永十一年十一月から十三年四月まで、日光山内定宝坊に止宿して日光山御宮の寛永大造宮の総奉行として、僅か一年半の短期間に陽明門を始めとする豪華絢爛たる結構づくめの現在の日光東照宮を完成させた事が、当時の覚え書に記録されている。造宮に関与した14家88名の内、秋元家中が半数近い42名と多く、いかに谷村藩士達が日光山造宮に尽くしたかが判る。

寛永十八年には神君家康公の霊柩を収める「石造の奥宮宝

塔を正綱と共に建立したが、この功績により將軍に許されて奥宮拝殿前に一对の狛犬が奉納されて現存している。

向って右が松平右

衛門正綱、左が秋元

但馬守泰朝の狛犬で、

この狛犬が神社に奉

納されるようになって

た最初のものと云

われている。



写真4 奥宮拝殿前の狛犬（秋元泰朝寄進）

泰朝は寛永十九年（六五）九月「日光山東照宮造宮帳」（資料4・5・6）を將軍家光公に差出して、十月二十三日、六十三歳で亡くなっている。

こうした功績に対して、天海大僧正が泰朝に「照尊院道哲泰安大居士」の号を送り、山内に「照尊院」の一寺を家光公の上意によって残す事となり、泰朝が造宮の際、常に止宿していた定宝坊を「照尊院」とした。



写真5 日光山東照宮造宮帳

(資料7 日光御山之絵図)

現在も泰朝の遺髪を埋めて嗣子富朝が建立した墓が照尊院に在り、

日光山内十五坊の一つとして秋元氏の坊が現存している。

また、亡



写真6 秋元泰朝墓碑
(照尊院境内)

くなる前に泰朝は家康公の御遺像を東照宮から拝領して谷村へ祀った記録が徳川実紀にある。この事は遺命を奉じて日光山東照宮を造営し、神君家康公に生涯を捧げた最後の勤めを終え、子孫と領民の安穩を祈って東照宮を勧請して谷村の守護神として祀ったものと思われる。

(2) 秋元富朝と日光東照宮

泰朝の功績を受け継いで代々の秋元家当主は日光東照宮の修造管理に当たっている。谷村藩二代目の富朝は、日光山火番となり、再三將軍の日光社参に供奉している。

富朝の治績としては、富士山の雪崩を防ぐために富士北麓に大規模な植林を行い成功して、現在も富士浅間神社に



写真7 富士浅間神社

に嫁がせ、後に、この外孫の男子富朝を養子として迎えている。

慶安四年(一六五二)四月二十日、將軍家光が薨(な)なると遺命により日光山に遺骸を収める奉るべく大猷院靈廟(家光廟)を造営し、その法会に参列しているが、明暦三年(一六五七)六月十七日四十八歳の若さで富朝は亡くなっている。



写真8 生出神社

隣接する地に「諏訪の森」として残っている。

このため谷村地内の四日市場にあった諏訪神社に、男子出生を祈願して社名を「生出神社」と改名して信仰したが、男子出生の願いは叶わず女子を三河田原藩主戸田忠昌

(3) 秋元喬朝(喬知)と日光東照宮

喬朝は、戸田忠昌の長子として生まれたが、婚礼時の約束で外孫だが九歳で秋元家に養子として迎えられ、富朝の後を嗣いで家督一万八千石の谷村城の領主となり、萬治三年(一六六〇)従五位下但馬守に任ぜられ、寛文五年(一六六五)には東照宮五十回御忌御法会に日光山火番を仰せつかり、寛文七年には大猷院殿(家光)十七回御忌御法会の御名代を勤めている。

喬朝については、元禄三年に全国の大名人二百四十三人の人柄について調べた史料「土芥寇讎記」に『喬朝、生得寛惇にして才智発明也、文武弓馬を嗜み、行跡最も法に叶い士民を哀憐す、是れ仁心有る故也。』とあり、最後に風評として編者による大名の批評があり、良將・善將は百五十人程度で、喬朝は、その代表格の一人とされ、五代將軍綱吉の厚い信頼を得ていた。

また、学問と文芸を好んだ將軍に仕えた喬朝は、將軍の御前で「論語」を講じ、「能」を舞い、絵画を奥絵師狩野常信に学ぶなど、優れた文化人でもあった。

事実、喬朝は延宝五年(一六八七)に奏者番(將軍の取り次ぎ役)となり、天和元年(一六八二)に寺社奉行、天和二年に

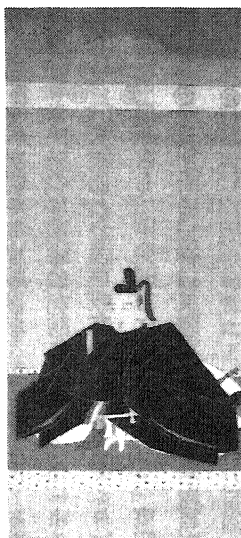


写真9 秋元喬朝画像

若年寄(少老)となり、元禄十二年(一六九七)には老中に出世して幕政の中枢を担う華々しい活躍をした。この間、地場産業の織物・郡内縞の紹介にも努めた。(資料6 谷村藩主秋元喬知と郡内縞)

また、日光東照宮には数々の將軍の社参に供奉し、老中として將軍の代参を勤めるなど、祖父以来の深い縁から東照宮に参詣している。

この間、元禄

十五年(一七〇〇)

には自坊の「照

尊院」に胎内に

祖父泰朝・父富

朝の位牌を収

めた「阿弥陀如



写真10
照尊院・阿弥陀如来像
(秋元喬朝寄進)

来像」を寄進している。

その後、秋元氏は宝永元年（一七〇四）に武蔵国川越に五万石で移封し、谷村藩は幕府の天領となつて石和代官の支配になり、城下町時代が終わった。

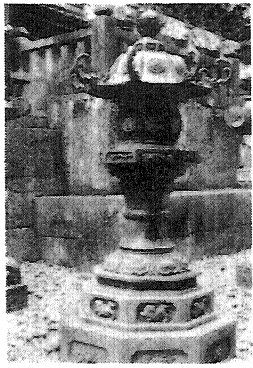


写真11
陽明門前の唐銅燈籠
（秋元喬朝寄進）

川越城主と成った秋元喬知は、正徳元年（一七一）に六代將軍家宣から東照宮百回御忌御法会の事を命ぜられ、正徳二年には日光山御宮修理巡察に赴き、正徳三年九月には御宮修理が完工し、陽明門前に一對の唐銅造りの燈籠を寄進して事を終えている。

しかし、喬知は祖父泰朝が神君家康公の一周忌に靈柩を収めた東照宮に老中として百回忌の準備を終えて、正徳五年四月に百回御忌御法会を執行する前年の正徳四年（一七二四）八月十四日に六十六歳で亡くなっている。さぞ、残念な思いであつたろう。

喬知は江戸時代の爛熟期である元禄時代の大事件「生類

憐れみの令」「赤穂浪士の討入り」大奥取締まりの「絵島生島事件」などを老中として厳しく裁断しているが、特に、正徳四年三月の「絵島生島事件」は月番で、当事者、御年寄絵島の高遠お預け、生島新五郎の三宅島流罪を始め、取締まり責任者であつた武士を磔斬罪にするなど、処罰者は数百人に及ぶ厳しいものであつた。この心労の為に生涯を早めたのではないかと云われている。